
CHANGE

らぶらどーる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

C H A N G E

【Nコード】

N 7 5 4 6 E

【作者名】

らぶらどーる

【あらすじ】

ある日の散歩で飼い犬と入れ替わってしまった。どうする？俺。

（前書き）

浅い妄想力と少ないボキャブラリー、さらに安易な設定ですが、すべてさらけ出して、搾り出しました。楽しんでいただけましたら幸いです。

くチェンジく

- 壱 C h a n g e -

相変わらずの飽和状態の湿気の中で 気づくと横たわっていた。

何の衝撃だったんだろうか？

痛みはないが目を開けているのか 閉じているのか 周りが真っ白でわからない。

「・・・」

さっきまで愛犬と散歩中だったんだ。 で、急に轟音とショックを受けたんだ。

「文太？」 リードをたぐろうとしたが感触がない。

しまった。手を離してしまったんだ。

何とかしようと思っても 残念ながらまだ視力が戻らない。

力が入らない。

耳鳴りも酷い。

変に高音部を強調したイコライザーがかかったようにキンキンした

音で聞こえてくる。

ともかく　まずは飼い犬の文太が事故に遭わないように確保してやらないと。

霧が晴れるように　おぼろげに視力が戻って来だした。

そこで　目の前に文太の前脚が映り込んできた。

どうも　倒れたときに下敷きにしてしまったらしい。

安堵した。

そばにいたんだ。

考えてみれば　あれだけの衝撃だったんだ。一緒に気絶しても当たりまえだ。

しかしなぜ、目線と前脚に高低差がないんだ？

あいつはラブドールだ。でかいのだ。

人が二人重なり合った状態に近いわけだから　水平にあいつの前脚が見えるわけではない・・・はず。

そこで、背中に重さを感じる。

目線を上に上げてみる。

・・・俺じゃん。俺が乗ってるじゃん。

とにかく、俺の体から抜け出さないと。

重いぞ、俺。

何とかもがいて抜け出してみたものの 立てない。這うことしかできない。

這いだして 這ったまま向き直る。手を突っ張って少し頭を持ち上げてみる。

俺はぴくりとも動かない。

いや、少し手先が動いた。がんばれ俺。

あれ、なんで他人目線なんだ？俺には俺が見えるわけない。

でも、今、俺は俺の体を見ている。「・・・幽体離脱？」

じゃ、もっと上から見てもいいような。話で聞いている限り 1 }

なぜ、50cm位の半端な高さから見下ろしてるんだ？

混乱してきた。

目線を真下におろす。脚が見える。足ではない。脚だ。

ましろな二本の脚だ。毛が生えている。

文太の脚じゃん。

もう、訳がわからん。

この体、動かせるのか？

よくよく状況を把握すると、前脚だけで頭を持ち上げていて後ろはまだ脚を使っていない。おそろおそろ力を入れてみる。「ガン。ム起動！」

なぜか冗談が出てくる。こんな状況にもかかわらず。

この状況よりも「生きている」という事実にあぐらしているのかもしれない。

よろけながら何とか立ち上がって 踏ん張ってみる。新鮮な感覚に包まれる。

文太の体を俺が動かしている。

要は「四つんばい」の状態がデフォルトなわけだ。

変に力が入るせいか、すぐ「お座り」状態に戻る。

これは困った。仕事はどうする？家庭はどうする？それよりもまず今どうする？

で、俺の体が少し動いたよな？さっき、「びくっ」て。

只の反射か？文太はどこだ？一緒にこの体に入っているのか？入れ替わったのか？

下手な物語じゃあるまいし そんな阿呆な。

視力は戻ってきているがモノクロームに近い状態のままだ。

相変わらず 耳はやたら高音が強調されている。

しかも、嗅覚。なんだこの様々な臭いは。

俺は副鼻腔炎もちだ。生まれてこの方 臭いには鈍感だ。

たまに鼻が通って感覚が戻ってきても、経験不足で何の香りかはわからない。

かすかに香ってくるキンモクセイの香りとか、栗の花の臭いとか、香水の香りとか。

そんなものはたとえ臭いを認識できても何かがわからない。

通常は料理の香りなんか、カレーとか少しわかるくらいで相当の空腹でも全く匂わない。

それが今、様々な香りに襲われている。

その全てが何の臭いではわからないが、まるで小さい粒子がうねるように鼻腔内にぶつかってきて 心地よく感じる。

背中が浮き立っているような感覚がある。静電気だろうか？

どうも雷の直撃を受けてしまったようだ。

途端、大粒の雨が一気に降り始めた。

すごい音だ。そして一瞬ですぐ濡れた。

とりあえず、生きているのか？俺。

鼻に鼻球を近づけてみる。空気の流れを感じる。良かった、俺、死んでない。

ふと、遠くから声が聞こえる。「おと~~~~さあ~~~~ん！」

すごい形相で嫁が走ってくる。傘を投げ捨ててサンダルも脱ぎ捨てて。

「おとうさん！」俺の体を必死でゆする。

嫁の身体からだろうか？驚きと不安の匂いがする。

俺はなすすべもなく その光景を見守るほかはなかった。

嫁が携帯を取りだし、救急車を呼ぶ。

「もしもし！」

「すぐ来てください。場所は県道8号線の舗道上です。」

「案内標識が見えます。」

冷静やね。君。

リードをつかむ。強く引っ張る。

俺の頭はショックとともに「ぐるん」と廻る。

勢いで後ろ足がたつ。

走る嫁。その後をぐいぐい引っ張られながら連いて行く俺。

十数メートルで家に着く。

玄関が開き、ぶち込まれる。

きびすを返して外に出て行く嫁。

おゝい、ドア閉めるの忘れてんぞ。

その後、救急車のサイレンの音。遠くから聞こえてくる。

「左に曲がります。ご注意ください。」 金属音声が響く。

家のそばで停まる。ドアの閉まる重量音。そしてサイレンが遠ざかる。

取り残された俺。連れて行かれた俺の身体。

とりあえず、玄関ドアを閉めよう。玄関ドアを見上げる。

閉めるたって、一体どうするべ？

仕方なしに いったん外に出て、自然に閉まる位置までゆっくり身体を預ける。

閉まりかけたところでドアに挟まれながら中に滑り込む。

土砂降りの雨音がドアの閉まる音とともに小さくなった。

何この状況？

整理してみる。

仕事をしていたんだよな。で、文太が「わんわん」吠えて

気が散って仕事にならないんで仕方なしに散歩に出たんだっけ。

外は梅雨特有のすごい湿り気で、空は厚い雲に覆われていた。

そして、あと少しで家に着くところまでは覚えている。

で、雷に打たれたのか？ そうなのか？

ふつつ、遠くでごろごろ言い出してから 落ちないか？

何でいきなり直撃するかな？

いや、そんなことよりもどうする俺？

玄関の土間で佇んでいた。

身体はびしょ濡れだ。足先は　つまり、パッドの部分はどろどろだ。文太の身体全体から　良い香りが立ちのぼってくる。

嫁が　雨に濡れたらかなり臭いといっていたな。なぜ、良い香りをするんだ？

とりあえず、玄関マットに前脚のパッドをこすりつけてみる。

少し汚れが取れた。

全ての脚を拭きながら　玄関脇の姿見に映った俺は文太だった。

びっくりした。

俺と文太が入れ替わっている。状況的にそうなんだと認識していたのは淡い感覚だった。

一気にリアルな認識になった。

俺、犬じゃん。まごうことなく、犬じゃん。

この身体になれていないせいか、たっているのがつらい。いや、這っているのがつらい。

横になりたい。ずぶ濡れのままでは寝ころべない。

とりあえず脱衣所に向かう。そこにはバスタオルがある。

端をくわえて ひきずり、踏んづけて転びそうになりながら居間に入る。

バスタオルをなんとか敷いて その上に横になる。

気は張り詰めているが なれない身体のせいか精神的に筋肉痛になった。 睡魔に勝てない。

心地よい自分の香りに包まれながら、あっという間に意識がとぎれた。

- 弐 K e e p -

目が覚めると夜だった。

薄明かりは 仕事を中断したときのモニタのそれだった。

身体を横たえ「F」になったまま、身じろぎもせず「ぼつつ」とモニタを眺めていた。

まだ仕事が終わってないんだが。

納期は明後日までだっけ？

とっさに身体を起こした。

そうじゃん。PCがあるじゃん。頭いい俺！

身体は乾いていた。

これならPCを壊す心配はない。

俄然やる気が沸いてきた。

PCのあるデスクに向かう。

文字が見えにくい。モノクロじゃん。ぼけぼけじゃん。

PCって、こんなにもキンキン音を立てるもんだっただけ？耳障りな音だな。

一気に萎える俺。

しかし、気を取り直して作業に取りかかる。

確かユーザー補助を使えば・・・。

まるで猫が毛糸玉で遊んでいるように マウスを扱いポイントする。

目的のアプリケーションを表示させて 前脚の真ん中の2本の爪でクリックする。

アイコンやフォームの表示を強調しカラーを見やすく変える。

だは~~~~~！疲れた。音のせいで頭も痛くなってきた。

いや、そんなこといつている場合じゃない。

まずはメモパッドを起こして、書き込む。

【身体が入れ替わった。俺は文太の中にいる。】

玄関のドアが開いて嫁が帰ってきた。

「文ちゃん。どこ？」

俺は廊下まで嫁を迎えに出て　P Cの方に誘導しようと試みる。

お帰り。な、これ読んで。

「お父さん、倒れちゃったの。意識不明なの。」

モニタ、見てくれんし。

意識はつきりしているから。目の前にいるから。犬だけど。

「これから　お父さんのお着替えもってもう一度いつてくるね。」

「あ、これ、ご飯ね。」

あ、おい！

いっちまった。いつもの「かりかりフード」を　えさ入れに入れて。

・・・腹が減った。臭いに敏感なのである。いつもと違う状況なのである。

ええい、こんなもん食えるかあ。
きます。

いただ

とりあえず、一口食べてみた。もちろん、「犬食い」である。

お行儀なんて あったもんじゃない。

薄味である。変な臭いである。しかもぼそぼそしている。

文太、よくこんなもんを食っているな。

しかし 腹は膨れた。バリケンに下げたある給水器で水も飲めた。

半分以上、だらだらと下に流れるわけだが。

食事を済ませて 仕事を再開することにする。

何とかして今仕掛かっている仕事を納期までに仕上げることが今で
きる唯一のことだ。

なぜか非常に前向きな気分である。

しかし、体勢がきつい。

後ろ脚でたって 前脚でマウスを「毛糸玉操作」 あんど 前脚の
爪でキーボードを「一本指打法」。

操作中 上半分は宙に浮いているのだ。

で、マウスをデスクから落とすこと多数。

マウス本体は啜えると水分で壊れそうな気がしたので。

ぶらんぶらんしている途中のコードを軽く啜えてデスクに戻す。

通常、ブラインドタッチだしマウス操作なんか無意識でやっている。

思考と作業のリズムが取れない。

俺、悪戦苦闘。

しかし、なんとか納期に間に合いそうだ。

「文ちゃん？」

振り向くと嫁が 目をまん丸にして立ちつくしていた。

病院から帰ってきたらしい。

俺は子供の頃から集中すると周りが見えなくなる。

無駄に集中力が高いのだ。

しかし「ぼく」をしていると他人には見えてしまう。

呆けているのと極限に集中しているのは全く違うが、生来の顔が同じに見えるのである。

ともかく、玄関が開く音も嫁の足音も聞こえなかった。

「何してんの?」「だめじゃない」

いや、だめじゃないから。生活がかかってるから。

すばやくタスクバーにマウスを持って行って さっきのメモパッドを見せる。

【身体が入れ替わった。俺は文太の中にいる。】

そして嫁に向き直ってお座りする。

さらに目がまん丸の嫁。

あの、おめめが落ちそうですよ。

駆け寄り、ひざまずく。俺の肩に手を置く。目を覗き込む。

「本当?文ちゃん。」

疑惑と混乱の匂い。

いや微妙に違うから。まだ文太が書いていると思ってるでしょ?

文太も一緒にこの身体に入っているかも知れないけど。

「前脚、上げてみてくれる?」

お安いご用。片方の前脚を上げる。

「立ち上がってくれろ?」

立ち上がる。

「頂戴は?」

ちんちんして前脚を持ち上げ交互に重ねる。

・・・遊ばないでください。

いまだに疑惑の香りが漂う。

もう一度 マウスパッドに一本指打法で書き込む。

【だから俺なんだってば】

しばし沈黙。

嫁が下の行に書き込む。

【なんでこんなことになったの？】

俺が書き込む。

【普通にしゃべってくれていいから。話せないのは俺だけだから。】

途端、糸が切れた人形のように「くたつ」としゃがみ込んで半泣き半笑いの嫁。

励まそうと「ぴたっ」と寄り添う俺。大丈夫か嫁？

「ぎゅ〜〜〜〜」って抱きしめる嫁。心地よい。安まる。

そして、何の香りだろう？柔らかい、優しい、良い香りがする。

しばらく俺たちはそのままだった。

- さあん Break -

【俺の身体はどうなった？】

「今 病院のICUよ。一回心肺停止になって大変だったんだから。」

【おいおい（；^_^A で、今の状態は？】

「持ち直しているの。先生が奇跡的だっておっしゃってたわ。」

【やべーーーーーーーー！！】

「先生がおっしゃるには、心臓は再鼓動を始めたんだけど、心電図が安定してないというか、波形がおかしいらしいの。」

「しばらく経過を観察して安定してきたら、精密検査をするらしいわ。」

・・・ 可及的速やかに元に戻らないと 俺が死んでしまう。

いや、意識はここにあるんだから 俺の身体が死んでしまう。の言い方が的確か？

あれ、そういえば文太は？文太の意識は？今どうなってるんだ？

もし、俺の身体が死んだら 俺と文太の意識はどうなるんだ？

「それとね」

【うん？】

「あなた雷に打たれたっばいわよね？すごい音と閃光だったんだから。」

「おかしいとは思わない？」

おかしいよ。おかしいだらけだつて。

「二人とも、傷一つないわよね？」

あ、そっちか。云われてみたらそれもそうだ。普通なら、丸焦げになっっているはず。

俺たちは思考停止した。ただいま起こっている奇妙奇天烈な状態について考察するには手がかりが少なすぎる。

翌朝、目が覚めると俺は犬のままだった。

昨夜はリビングの絨毯の上でバスタオルを敷いて寝た。

一度はベッドで寝ようと思ったのだが、なにぶん、毛皮を着用している身。暑いのである。

しかも、抜け毛が半端ないのである。

ラブラドルは短毛種だから、室内飼いも抜け毛が少なくて楽よね。って。

確かに毛は短い。しかし、甘い考えであつた。

いくら室内飼いとはいえ、いくらかはお外に出す時間がある。

最低でも日光浴を兼ねて日に15分。

しかし、あいつらは土があれば、その上で「ごろんごろん」する。

水たまりなんかがあつた日にゃあ、まず間違いなく突撃をする。

もともと湖に撃ち落とされた水鳥を回収する犬な訳だから水が好き

なのは仕方がない。

で、毎日シャンプーしてやるわけにはいけないので、濡れタオルで拭き取って家に帰る。

それでも、室内は土埃がすごいし、エアコンのフィルターは見たことのない画期的な色になっているし、白い壁はいつの間にかうす茶色。

「まるで犬小屋に人が住まわせてもらっているみたい」と、知り合いのラブ飼いが云っていた。

嫁は起きていて、すでに朝ご飯の支度を整えていた。

【俺のは？】

「あなたは、かりかり。」

【え~~~~~（T・T）】

「だって、身体は文ちゃんだよ。人間の食べ物そのまま食べちゃいけないと思うの。」

納得はできない。しかし理解した。

あきらめてかりかりのフードを食べることにした。

となりで人間用の朝ご飯のいい香りを嗅ぎながら、フードを食べる俺。

昨日も食べたわけだが、不思議と違和感が減っているような気がした。

慣れたのか？変な臭いじゃなくなっている。

これなら大災害が起こっても 生きていけるかもな。

フードならいつも一袋17kgを取り置いてあるからな。

ラブドールは大食漢である。一袋17kgのフードは約一ヶ月でなくなる。

余談だが俺の脛もかなり細る。

そしてその食べっぷりは見事である。秒速で食べきる。

もしも、食べる速度が遅かったり、フードが残ったりすることがあったら、病気を疑ってもかまわない。

「私、病院に行ってくるから。」

【気をつけていっておいで。俺に「お大事に」っていったいて。】

出かける嫁。玄関まで見送りに行く俺。

そのとき、向かいの塀の上に黒い猫が寝そべっているのが視界の端に入った。

正確にはモノクロームで見て黒い猫なわけだが。

声をかけられた。

「おい。」

振り向く俺。

「こりゃ、面妖な。犬の器に人が入っておるわい。」

「あんた、見えるのか？理解するのか？」

その猫は、口を開けてしゃべっているわけではない。

目で語りかけている。

生まれてこの方、猫と目で会話したことなど、あるわけもない。

身体が犬になっただけじゃなく、こんなことも変わるわけだ。

「入れ替わったようじゃな。」

「ということは、文太の意識は・・・」

黒い猫は、視線を外し大きくあくびをした後で「ちりん・・・」と、鈴の光沢音を響かせ

それから俺の目を見つめ直す。

「おまえさんの身体の中じゃ。」

・・・！

「いいではないか。滅多にできぬ体験じゃぞ。」

そうですか、完全に人ごとですか。

「まあ、おまえさんがそのように拘ねるのも、わからんわけではないがな。」

ひえ。意識が読めるんですかあ。

「あたりまえじゃわい。何年やっているとと思うとる。」

しりませんかな。初対面の黒い猫さんの経歴なんて。

「ほっほっほ。初対面とな。」

ち、違うんですか？

「まあ、よい。」

「ところでじゃ。命はどうやって誕生したのか、知っておるかの。」

あれですか？生殖・・・。

「おまえさんの大好きなそれではない。どのように無機物から生命が発生したのか、知っておるかと尋ねておる。」

俺の趣味までもご存じなんですね。いや、それはおいといて、ええと。

濃厚な原始の海水に放電現象（雷）が落ちて、有機物が誕生した、と聞いたことがあります。」

「正解じゃ。但し……。」

ただし？

「この星での話ではない。遙か彼方の星での出来事じゃ。」

「その星 『ファースト・プラネット』は 他の天体と衝突して砕け散った。」

猫はゆっくり目を閉じて ゆらゆらと塀から下がった尻尾を動かした。

偶然にですか？もったいない。

猫はまた、目を合わせる。

「偶然などではない。いや、偶然などないのじゃ。もったいなくもない。」

「すべからく必然じゃな。因果応報という言葉があるではないか。」

あの、『すべからく』、誤用です。

「それはその星の行いが、グレートマターの意志から乖離したからじゃ。」

無視かい。スルーかい。

「いくら富み栄えても、それはその文明自体のみで成り立っていたわけではなく、当たり前のように環境を変えておる。他の生物を食べ、鉱物資源を掘り、大気の組成までも変えてしまう。そうして生態系や惑星のあるべきバランスを崩し過ぎておったんじゃ。」

「しかも 搾取するだけ搾取して、そのことを気にもかけておらなんだ。」

「この星も、須くバランスを取るべし」

ちゃんと使えるじゃあ、ないですか。『すべからく』

「結果、ファースト・プラネットは消滅した。しかし、そのかけらがこの星にたどり着いた訳じゃ。」

俺は、パンドラの箱の話を連想していた。

惑星のバランスの崩れは パンドラの箱を開けようとする行為。

惑星の崩壊は 箱から出てきた災い。

そして

箱に残った希望は ファースト・プラネットとかいう惑星のかけら。

そういうお話、嫌いではありません。

「星の話が嫌いな奴はあまりおらぬ。無意識に己の原風景を重ねるからの。」

「云うて置くが、興味本位だけで聞いてはならぬぞ。これからのおまえさんにかかわりのある大事な話をしておる。」

はい・・・。

「宇宙には何がある?。」

星ですか?

「ダークマターという言葉聞いたことはないかの?。」

星間物質ですか?

「そうじゃ。その反対の物質は何か存じておるか?。」

星ですか? いや、ブラックホールですか?

「違うな。グレートマターじゃ。」

聞いたことないですね。

「『光』の反対は「

『陰』です。」

「残念、光と陰は一体じゃ。」

はあ?

「『好き』の反対は？」

「嫌い」です。

「残念。『無関心』じゃ。この話を理解するにはこのようなセンスが必要じゃ。」

そっついながら猫は立ち上がり、大きくのびをしてまた寝そべった。そして、射るようにまなざしを向ける。

「宇宙の始まりは知っておるか？」

「無」から始まったと、どこかで見たような気がします。

「左様。最初は「無」じゃ。」

「しかし「無」はどこまで行っても「無」じゃ。」

「ある日そこに揺らぎが起こって 干渉あってインフレーションが発生しビッグバンが起こる訳じゃ。」

「その揺らぎを起こしたのが「意志」じゃ。意志を認めて力を貸したのがグレートマターじゃ。」

無の空間＋意志＋グレートマターの働きで宇宙は誕生したと？

「左様。三位一体じゃ。」

俄には信じられません。

「今はまだそうであろうな。」

「では、おまえさんはどうやって生まれてきたのかな。」

親父とお袋の愛の結晶です。

「ある意味正解じゃ。が、産もうとする意志と生まれようとする意志とさらにグレートマターの力添えがなければ誕生までのポテンシャルは発生しない。」

「それはまさに三位一体。宇宙の誕生に等しい状況であるんじゃない。」

「ところがだ。「たらたら」やっておると、ファースト・プラネットがそうだった如く、ダークマターに取り憑かれるのじゃ。」

いや、怠けていた訳じゃなかったんだと思いますが。

「そうかの？仕事が行き詰まってその上、納期が来ても、だらだらとネットサーフィンしたり、今でもほれ、「もう俺、犬でいいや」と思っではおらんかの？」

だって、どうすればいいんですか？どうしようもないじゃないですか？

「しらんわの。」

それはそうでしょうけれど・・・。

「あるがままに捉えるが良い。ヒントは会話の中にある。グレート

マターを当てにしてはならぬ。しかしグレートマターは純粹に正當な心に力添えをするであらう。」

「時間はないぞ。おまえさん、徐々に犬化してしまう。」

え~~~~~!!!

「しかも、おまえさんの身体に入っている犬、そう長くは持たん。」

え~~~~~!!!

「追い込まれる前に、行動するんじゃ。純粹な思いを募らせてな。」

文太は、俺の身体で生きている。俺はとても安心した。

「そう、そういう思いじゃ。」

「あれは頑張っておる。普通、器が大きいと命は維持できんものなのじゃ。」

「急ぐが良い。」

あれ？あちら側に落ちたのか？急にいなくなった。師匠~~~~？

- 四 B a c k -

リビングのひんやりした床の上で身体を延べて おなかを冷やしな

がら思いを巡らせる。

雷撃で俺と文太は身体【器】と精神【魂】が入れ替わった。

原因は 俺の普段の生活態度が間違っているから。すまん文太。

俺が思考できる時間は有限で、いずれ犬並みになってしまいうらい。

で、文太が俺の身体を支えている。しかもピンチ。

やばいじゃん。

嫁にメールを入れる。【シキユウ キタク サレタシ】

病院内じゃ、携帯を切らないといけないだろうから連絡が着くには時間がかかるか。

しかし、どうやってもう一度入れ替わるんだ？

「好き」の反対は「無関心」・・・か。

うがぁ！何も出てこないじゃん。

A

E

D

・・・

脳裏に3つのアルファベットが浮かんだ。AED！それだ。

ドラマとかの手術のシーンで「ばん！」って、やって心臓が再鼓動する装置。

病院だからAED、あるし……。

調べなきゃと、AEDをググってみる。問題点がない訳じゃない。

- 病院内は通常、犬出入り禁止です。
- 素人向けとはいえ嫁がいきなりAEDを操作できるのか？
- AEDは自動で心電図を解析して、必要がなければ動作しない。動作してくれるのか？

時間が惜しい。

文太がいつまで持つか。

電話が鳴る。親機の液晶画面が嫁の携帯電話の番号をバックライト

に浮かべる。

頭を横にし、充電式のクレイドに立っている子機を咥えて取り、そのまま聞く。

「おとうさん、聞いてる？文ちゃん、危篤なの。メール見たわ。これから迎えに行くから。」　うわ！。頑張れ文太。

今のうちにとPCに打ち込む。

【AEDを病院で用意してもらってくれ。】

暫くして嫁の運転している軽四のエンジン音が遠くから聞こえてくる。

嫁は居間に入るやいなや　俺の首輪にリードをフックする。

そうしながらモニタ画面に目をやる。大きくうなづく。

急に強く引つ張る。

俺の頭はショックとともにぐるんと廻る。

勢いで後ろ足がたつ。

走る嫁。その後をぐいぐい引つ張られながら連いて行く俺。

またかい・・・。

後部座席にぶち込まれ、乗る。

「最期だから、家族の犬にも会わせてって、先生にお願いしておいたから。」

ほんとうに そつがないやね。

病院に車が滑り込む。俺と嫁は個室に向かった。

俺がベッドに横たわっている。すでにチューブとか、外されてるし。

が、丁度電気ショックの用意がされている。

顔を見合わせる俺と嫁。超ラッキー。

「離れてください。」先生の声。

「用意！」

その場のスタッフ達が一步下がって ナースがスイッチを押そうとしたその刹那。

「今だ！」

俺は身を翻して俺の身体に飛び乗った。

「どん！」 機械が作動した。

先生がおもしろい顔になっているのが見えた。嫁が見え・・・おめがこぼれそうです。

ナースはムンクの「叫び」みたいです。

景色が回っている。ゆっくりとパノラマのように。

「お~~~~やぢ~~~~!」

誰だよ。

「わしじゃが。」

文太？何で岡山弁。

「わし、頑張ったで。」

おう、よくやった。今まで俺の身体を保たせてくれてありがとな。

「わし、おやぢにまた会えて涙目。」

俺も、涙目。

「もう、おえん（ダメ）って、思うとったんじゃけどな。」

こっちも かなりおえんかった。

「でもな、もう一回散歩してもらおう思ってたな。」

そうか、そうか。そんなに俺に会いたかったか。文太！よくやった！感動した！

「さすがに腹減ったんじゃないが。」

・・・腹減らして動けんから、俺の心臓は止まりそうだったんかい。

家に帰ったら ご飯食べてお散歩行こうな。

「うん。わし、家に帰る。」

「おやぢ、ありがとうな。」

？俺、なんかしてやったか？

目が覚めた。天井の無機質な模様が見える。家の天井じゃない。

俺は横向きで起きるから、普通天井は見ない。

「おはよう」

病院のさっきの個室だった。

嫁がうつむき加減で覗き込んでほえんでいる。

おお！総天然色だ。フルカラーだ。全てが美しく見える。嫁までが美しく見える。

そういえば、嫁と正対して顔を見るのは 久しぶりだろうか？

微笑み返した。嫁の顔がほころぶ。

「文太は？」

「追い出されちゃったわよ。臨終の患者にアタックするんだもん。」

生きていた。文太も戻れたんだ。

「迷惑かけたなあ」

嫁がかぶりをふる。

「おかえり」

「ありがとう」

帰ったら文太にすっかりご飯やんなきゃな。

病室の窓に 梅雨の中休みの茜色に染まる夕映えを見ながら、俺はしみじみ思った。

遠くで、「ちりん・・・」と、鈴の音が聞こえた。

〜了〜

最後までお読みいただきまして まことにありがとうございます。

（後書き）

実は初めての作品です。

現在、絞りがす状態です。何も出てきません。

が、さらにパワーアップできて 楽しんでいただける作品作りができたらなあ。と、思っております。

最後までお読み下さった方、ありがとうございます。

途中で何らかの事故で？読む気が失せてしまった方。

ご迷惑をおかけしてすみませんでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7546e/>

CHANGE

2010年12月9日00時50分発行